



INVIDIA

MONSTRA INVIDIAE MONSTRA INVIDIAM

水橋パルスィ合同企画



妬ましい…

妬ましい…







梅雨の橋姫



水
橋
八
川
ス
ト



舌切雀「大きな葛籠と小さな葛籠」

水橋バルスイ

アト

猫車乗り

WHEELBARROW RIDES



WOW, THAT
LOOKS EXCITING.
DO YOU THINK I
COULD GO FOR A
RIDE IN YOUR
WHEELBARROW,
ORIN?



OH, SORRY.
WHEELBARROW
RIDES ARE ONLY
FOR THE DEAD.

WHAT IF I...
WAIT!! OKAY,
OKAY, I'LL
GIVE YOU A
RIDE!!

うーん なんとも楽しそう
お燐 その手押し車で
ライブができるかしぃ?

ああごめんよ
あたいのは死体専用なんですね

だうたら、ちょ、待つた待つたー
乗せてあげるからさー





—H...n^oT=H-

おまかせ★ほっか



橋姫の日常第二話「橋姫の暇つぶし」

新記録♪

ニヤ

ニヤ

ぶちマル

ぱし、

よしつ

新記録♪

?

!?

うん

可愛い
女のやうじゅう

それ、
もひつてくれるわ。

なつ

かあああ、



京に八つ橋というものあり。それは京都を訪れる老若男女の懷からいとも鮮やかに金子を奪い去るという、神社仏閣の多い京都ならではの靈威に溢れた銘菓である。

そんな八つ橋が、パルスイの手の上に置かれてあつた。

ここは人里。妖怪の数が人よりずっと少ない希なコミュニティ。

そこで彼女は声を張り上げた。

「いらっしゃいませえ」

本来なら客商先に一番似つかわしくない奴が恐ろしく順調に客商売なんぞをおこなっていた。

未だかつて何人が見たか判らない、輝く笑顔のバーゲンセール。

嫉妬深い彼女は光る汗を手で拭いながら、目を細めて歯を見せては、何故か巫女装束を纏い、どこか慈悲深い笑みを浮かべている。

——嗚呼、妬ましい。——

パルスイは今まさに、絶好調であった。

事の発端は数日前に遡る。

私は私の管理する橋の上で、酒臭い鬼に絡まれていた。

「八つ橋とパルスイは似ているなあ」

「はっ？」

絡み酒つてだけでも鬱陶しいのに、言つていることがわけわからなくて頭が痛くなる。

ここは地底で、それも橋の上で、何故か墓塚まで敷いての酒宴の真っ最中。通行人は隅を往けという傍若無人っぷり。

とはいっても大掛かりなものではなくて、私と勇儀とキスメとヤマメと萃香と、あと何時の間にか混ざっていたこいしの六人だけの小さな酒盛り。

この酒宴、誘われたとか誘ったとかそういうのではなく、突如ここに湧いてきて私を巻き込んできただの。迷惑千万だわ。私これから用事あるのに。

ああ、私は博麗神社に往きたいだけなのになんで邪魔するのか。どう

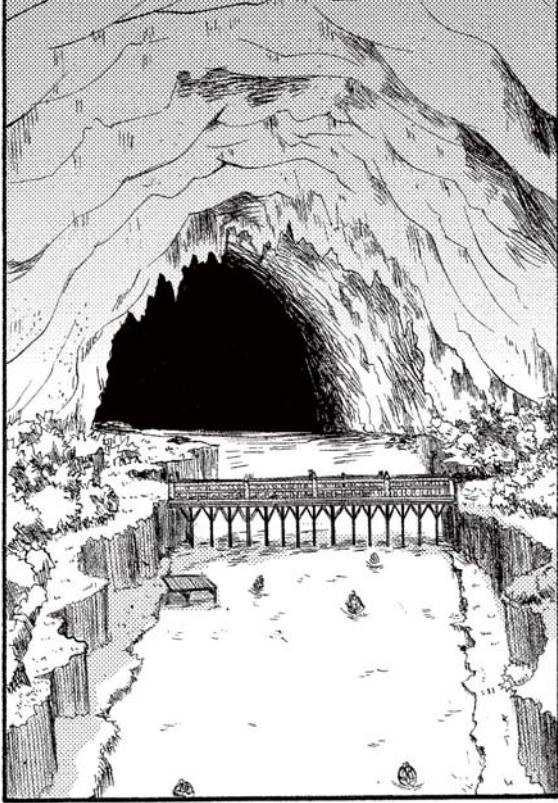
して私が酒を飲むまで通さないという意地悪をしようとしてですか。折角久しぶりに地上に出て靈夢にお菓子を振る舞つてもらおうと思つてゐるというのに。お客様万歳なのに。妬ましい鬼たちめ。

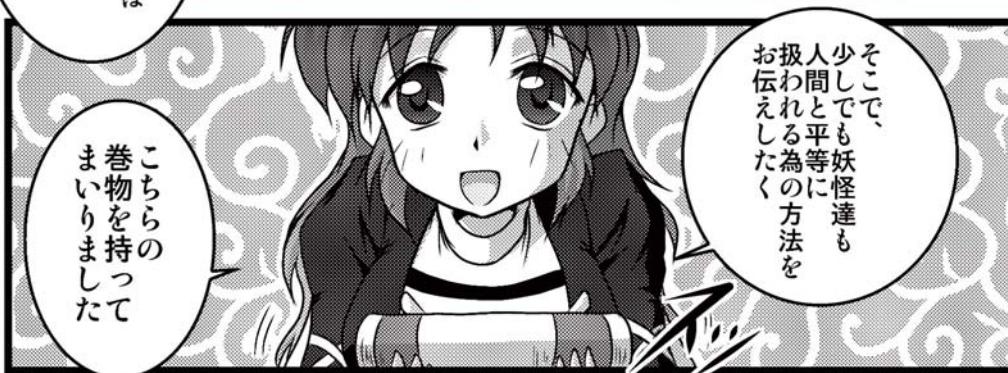
ちなみに、何故わざわざ地上の靈夢に会いに行くのかと問われれば、あれを見るのが結構好きだからと答えましょう。

あの子つたら嫉妬操つても嫉妬しないくらい頭の中春なんだもの。

横で嫉妬を与えながらお茶でも飲みたいわ。

まあそんなわけで、今日は博麗神社に往くことになつていた。











あの頃は、石というものに憧れていきました。

遠花火は昔の音です。瞳を閉じるだけで未だによく聞こえます。橋の裏側、使い古した蜘蛛の巣や朽ちたさざくれに縁取られた、風流や情趣の欠片もない景色を潔く視界から削り取り、耳を澄ましてみれば、今もあの勇ましい炸裂音を悠々と空耳することが出来るのです。

遠く離れたこの場所から、都の彈ける花火が見えたことはありません。勇壮な音と光は遙かな距離に稀釈され、はたはたと闇に薄く明滅するなど、ずいぶん醜氣に届くばかりでした。あの足許には火薬のけむりと、恐らく噎せ返る酒精やつまみの匂いが鼻をつき、人びとは訳も分からぬ唄を唄い、金色がまとわり櫓が建ち、提灯の下ではまるで出鱈目に踊り狂う者達が居る。その祭とは裏腹の、静けさに沈んだ河原に架かる古橋の袂に私は瘦せた身を委ね、誰にも触れ合わぬことに心地よさを感じて、眠るでもなく、死ぬでもなく、ただ毎日と同じように一日中瞳を閉じていました。自分が自分が自分で嫌いな理由について、少しずつ薄紙を剥ぐように考えては、かさぶたのようにそっと戻していたものでした。

——今、今日、その時のように遠花火の音を手繕っていると、いつもこのような一つの声に辿り着くのです。

『あら、静かなところで呑もうかと思つたのに
——その声で、私は薄目を開けました。

ひよいと、橋の上から小さな顔が覗いておりました。身を乗り出した可憐げな顔は小児のそれに似ており、恐らく橋に這いつくばつて欄干の下から肩より先だけ乗り出し、素首をぶら下げ、さかさまになつてこちらを見ていたのです。稚く搖らぎのある雰囲気は、巷説に言う酒呑童子の伝説に、今思えば準えられるよう思います。

「先客がいた……貴方も、一人で呑むのが好きな口ですか？」

私は小さく嘆息しました。彼女を視界の脇に外し、河面の暗い流れに視点を合わせず、とにかくその顔を見ないようにしたのです。

「よいしょ」

童女は橋から河原に飛び降りてきたようで、私はいよいよ瞳を閉じました。横向きに首をゆつくり三回振つて、よもや会話など望んでいたかたた私は、そのまま動かなくなりました。

「あ？　ああ、ごめんなさい……一人で呑むのが好きな人の傍に寄り添うのは、ダメですね。あ、いやでも許して下さい、私も一人で呑むつもりだったのです。見ず知らずの方と、騒いだりはしません」

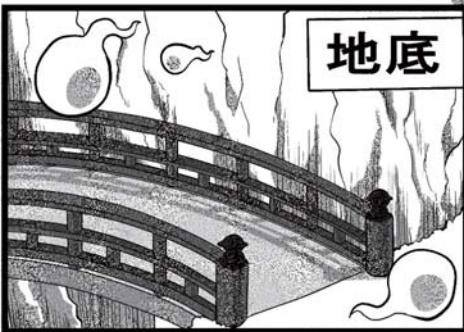
「……」

彼女はよく喋りました。そしてひどく独り善がりな言い方をし、そのままどうやら私の真横に座り込んだらしく、風が来ました。

口調が奇妙に懸勧で、今思えば何とも不思議な少女でした。

流浪の無賴漢も少なくない地底の世界で、見知らぬ醉客を真横に座らせる間抜けはそうう居りません。なかんずく私は、私が失われるのを





お妬み
相談所

作: 清水奈津子(しみずなづこ)

遙かな記憶の中、なぜ私はここでいなければならないのでしょ？

気づかぬうちに、その、長い時を経た橋にはそこから決して永遠に離れられぬ、一人の橋姫がおりました。

ねえ、私に聞こえるわ。嫉妬でいっぱい。いつからここにいるの？あなたも私と同じ忌み嫌われた存在に見えるわ。

在久遠的記憶中，
是爲了什麼事物必須守在此地？

不知已經跟隨歷史多久的這座橋上，
一位從未離開的女子橋姫。

被厚重怨氣包圍著的嬌小身軀，
靜靜的傳達著不悅情緒給路過的旅人。

彼女の細い体に取り巻く妬みや嫉みは、
橋を渡るのに、静かに不安を煽るのでした。

今…新居を建てている所なの。でもちょっと
私には広すぎるから、一緒に来てくれないか
しら？

我啊：

正在建造新的居所，
不過那裡實在是太大了，
你就跟我一起走吧。

看來你跟我一樣惹人厭呢，
或許連你也都討厭我也說不定哦。

喂。

忌妬心深重的傢伙，
妳守在這座橋上多少年了呢？

あなたも私が同族だと分かっているようね。

橋姫ね…本当はとても善良は妖怪よ。
見た目も綺麗だし。

橋姫呢，其實是個心
地很善良的妖怪啊。

而且樣子長得很不錯。

なんで橋姫のことを
そんなに悪く言うのよ？

怎樣在說橋
姫的壞話了？

ニヤ-----

さとりさま〜〜！

早覺大々～！



嗚！



もし彼女が誰にも
嫉妬されなかつたら…
大家的嫉妒心…



洞窟の終わりは地上の光
暖かみのある、光

橋の反対には旧都の光
娯楽と賑わいの、光



そして私は、その光と光の狭間に、いる

「さようなら、気をつけて！」

—¡Adiós, buena suerte!

水橋パルスイは偽の笑みを浮かべ二人の僧侶を見送った。都の先への行き方を示したが、地底に潜む多くの危険に関してはまったく触れなかった。それは彼らの問題であり、パルスイにはまったく関係の無いことだ。

Parsee Mizuhashi saludó a los dos sacerdotes con una falsa sonrisa. Les había indicado el camino correcto para llegar más allá de la ciudad. Sin embargo, no les había advertido sobre los múltiples peligros que acechaban en el mundo subterráneo. Ese sería su problema, no el de ella.

(あんなやつら嫌いだ)と唇を噛みながら吐く。(なんて妬ましい、恵まれていて、幸せで、不公平だ。でも、彼らは…)

—Los odio —gruñó Parsee, mordiéndose la comisura de los labios—. ¡Cómo los envidio! Tanta suerte, tan felices… No es justo. Ellos…

…死ぬのだ。愚か者め！あの乱暴な巫女ともっと酷い普通の魔法使いとやらがだけが地底から生きて帰ってこれたので。しかもその過程でパルスイに様々な危険な飛び道具を投げつけてボッコボコにして意識を失う寸前まで追いやった後にだ。パルスイの最も強い攻撃すら彼女らを止めることは十分ではなかった。とはいっても、彼女らはあまりにも楽しそうだったのでパルスイはどうやって彼女らを倒そうかなどと考えず、怖さの中から込み上げる怒りと妬みに身を任せただがむしゃらに飛び込んで行った。

Ellos iban a morir. ¡Ilusos! Aquella bruta miko y la aún más bestia y ordinaria bruja de blanco y negro fueron las únicas personas que regresaron con vida, no sin haberla golpeado y pateado salvajemente (además de arrojarle toda clase de mortíferos proyectiles) hasta casi dejarla sin sentido. Ni sus ataques más poderosos fueron suficientes para detenerlas. Claro, se divertían tanto que Parsee jamás se detuvo a pensar cómo derrotarlas: se lanzó a ciegas, impulsada por la locura y unos celos de temer.

一瞬、涙がパルスイの視界を妨げる。「畜生…」と心の中で思った。

Por un instante, las lágrimas amenazaron con nublarle la visión. “¡Malditos todos!” Pensó.

PARSEEEEEE!
パレスリー!

ARE YOU
DOWN THERE
AGAIN?
またそんな所に
いるの?

WE'RE GOING
TO TOWN WANNA
TAG ALONG?
村に行くけど
一緒に行く?

NO THANKS
結構

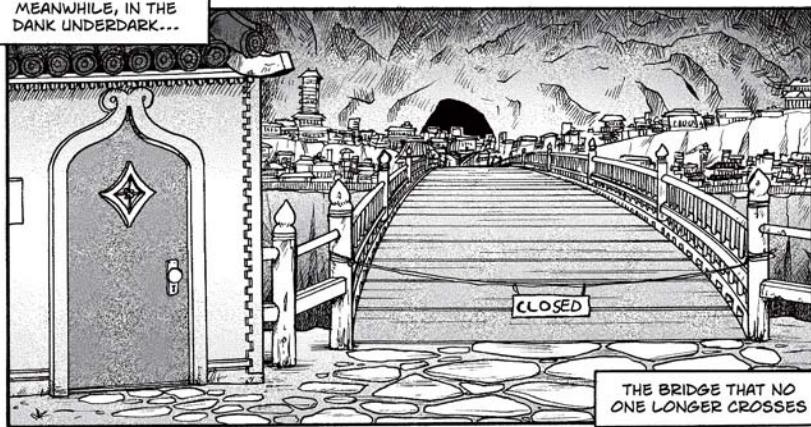
JUST GO
AWAY!
さっさと行け!

なんか飽きてきたからこの
戦闘さっさと終わらせ!



その傾じめじめの地底では

MEANWHILE, IN THE DANK UNDERDARK...



渡る者の途絶えた橋

落ちぶれた橋番、水橋。ハルスイ

DEMOTED BRIDGEKEEPER:
MIZUHASHI PARSEE



THEY SAID
I WAS MAD!



狂つが狂つてないわよ！ ただ自分に
話しかけてるだけ！

BUT A BRIDGE-KEEPER MUST
ALWAYS GUARD
HER BRIDGE!
SHE CANNOT
CROSS IT!



ど橋番はいつも橋を守らなければならぬ！ すぐ嫉ましい！

最近こうへんは寂しいわね…かれこれ100年は誰もここを通つてないし！

■名前:水橋 パルスイ(みずはし パルスイ) ■種族:橋姫 ■能力:嫉妬心を操る程度の能力 ■職業:不明
Mizuhashi Parsee

■所在:地上と地下を結ぶ縦穴 ■二つ名:地殻の下の嫉妬心 ■テーマ曲:緑眼のジェラシー

■スペルカード:妬符「グリーンアイドモンスター」／花咲爺「華やかなる仁者への嫉妬」
舌切雀「謙虚なる富者への片恨」／恨符「丑の刻参り」／嫉妬「緑色の目をした見えない怪物」
花咲爺「シロの灰」／舌切雀「大きな葛籠と小さな葛籠」／恨符「丑の刻参り七日目」

非常に嫉妬深く、楽しそうに移動している奴が気にくわない。そういう奴を見かけると、つい邪魔をしてしまう。嫉妬はさらなる嫉妬を生み、彼女は嫉妬狂いであると同時に、他人の嫉妬心を煽る事が出来る。

地上と地下を結ぶ縦穴の番人というか守護神である。地上世界から無事に地下世界に辿り着けるよう、また逆に地下世界から地上世界に辿り着けるように見守ってくれる。

上海アリス幻樂団「東方地靈殿」より

がんくま:ゲーム中の会話でパチュリーからペルシャ人かな?と言われていますね。

パールシーという言葉が亡命ペルシャ人をさした言葉であること、外見が緑眼金髪であることから彼女はペルシャ人と言われている。

中 雜 魚:あとエルフ耳ね。神主自身は地靈殿に関するインタビューの中で、橋姫(はしひめ)のハシは、要は波斯人(はしひと)でペルシャ人のことを指してののかな、と思ったところから、あえて橋姫をペルシャっぽい人にしてみた、と語っていますね。

がんくま:ペルシャ人とは言い切っていないのだね。ペルシャ人の子孫かもしれないわけだ。だから日本式の苗字を持っているのか。いやね、調べてみると奈良時代(飛鳥時代)の日本は舶来文化の吸収に熱心で、唐や新羅を経由して古代ペルシャ人が来ていたような記録があるのね。平城京って今から想像するよりずっと国際都市だったみたいですよ。酒船石とか益田岩船とか奈良の謎の巨大石器を作ったのはペルシャ人だという説もある。

中 雜 魚:神主もその辺から着想しているんでしょうね。

がんくま:私は二次創作化にあたってパルスイ本人がペルシャ人であることにしちゃいましたけど。で、ペルシャ人の女の子がはるばる日本までやってきて、どうして宇治の橋姫になったのか、というストーリーを書くにあたって、日本にあるペルシャの古物、紺瑠璃杯(こんのるりはい)の謎をモチーフにさせてもらいました。

中 雜 魚:東大寺正倉院宝物の青いガラス器ですね。諸般の事情で画像が載せられないのだけど、紺瑠璃杯でググったら出てきます。

奥付

2010年3月14日 初版発行

書名

水橋パルスイ合同企画 -INVIDIA-
MONSTRA INVIDIÆ MONSTRA INVIDIAM
(和訳:嫉妬の妖怪よ、汝の妬みを見せて呉れ)

原作

東方Project(上海アリス幻樂団)

発案

中雜魚酒菜(街角麻婆豆)

編集

中雜魚酒菜(街角麻婆豆)

ボイスドラマ制作

ムラサキノオト

製作

街角麻婆豆

マスタリング

Ciela(Aleile)

デザイン

増田(OTAD)

外国語スタッフ

■ 海外組総監督:中雜魚酒菜(街角麻婆豆)

■ 中英翻訳:杜基比～Rapianyo～(街角麻婆豆)

■ 日中翻訳:杜基比～Rapianyo～(街角麻婆豆)

■ 韓国担当:Kokurinn(街角麻婆豆)、優羽(街角麻婆豆)

■ 日韓翻訳:Kokurinn(街角麻婆豆)、優羽(街角麻婆豆)

■ 韓日翻訳:Kokurinn(街角麻婆豆)、優羽(街角麻婆豆)

■ 英語圏担当:Talka(ddiction.org)

■ 英和翻訳:Talka(ddiction.org)、中雜魚酒菜(街角麻婆豆)

■ 中国語圏担当:杜基比～Rapianyo～(街角麻婆豆)

■ 中日翻訳:杜基比～Rapianyo～(街角麻婆豆)、中雜魚酒菜(街角麻婆豆)

表紙イラスト

小鳶一豪

印刷・セットアップ

POWER PRINT

プレス

テックトランス

発行

街角麻婆豆

URL:<http://mapoze.com/>

無断コピーバルバ

204